

黒島伝治「銅貨二銭」と「豚群」のあいだ

椋 棒 哲 也

はじめに

青野季吉「自然生長と目的意識」(『文芸戦線』六一五・九)は、プロレタリア文学運動について、「目的を自覚したプロレタリア芸術家が、(略)自然生長的なプロレタリアの芸術家を、目的意識にまで、社会主義意識にまで、引上げる集団的活動である」と述べた。のちに青野「自然生長と目的意識再論」(『文芸戦線』昭二・一)は、この目的意識論に対する〈誤解〉を列挙しており、同時代の論壇における反響の大きさが窺われる。そしてこの論に影響を受けて、自らの作風が変わったと述懐する作家もいる。

黒島伝治である。その「農民文学漫筆」(『文芸市場』六一五・一〇)は、まるで目的意識論に呼応するかのようには、「作者が階級的立場にあつて、農民の生活農民の精神を視、それを理解して、表現を与へて行きたいと思ふ」といい、さらにそのような作品は「結局プロレタリア文学の一分野であらうと思ふ」と述べて、階級意識を反映したプロレタリア文学への意欲を見せている。また

「僕の文学的経歴」(『文学風景』昭六・一)は「『文芸戦線』に発表した「銅貨二銭」(六一五・一)や「踏み台」(同・八)などをシャルル・ルイ・フィリップ風のものだと」顧みたくうえで、しかしその作風が「大正十五年十一月に「文芸戦線」に出した「豚群」に到つて、変つてきた。「豚群」は、当時の、青野季吉氏の「目的意識論」に影響せられるところが多かつた」という。

先行研究も、黒島の作品に目的意識論の構図をあてがう。『現代日本文学大事典』(昭四〇・一一、明治書院)は「プロレタリア文学」(項目執筆者・小田切秀雄)について解説するなかで、「『電報』(『潮流』六一四・七……引用者注)「二銭銅貨」等の生括的思考が「豚群」や「渦巻ける鳥の群」(『改造』昭三・二……同)等の社会主義文学へ成長し」と説いた。また三好行雄「豚群」について——その周辺」(『国語展望』昭五〇・三)は「黒島伝治の初期農民小説はまさしく、自然生長してきたプロレタリア文学であつた」と、と目的意識論以前の黒島文学を論じた。浜賀知彦『黒島伝治の軌跡』(一九九〇・一一、青磁社)は「豚群」を、それ以前の「(農村もの)の暗い受け身の世界から反転して、農

民が自らの意志で地主と闘い勝利するという内容をもった作品で、「それが「目的意識的に書かれたことは確かだが、一つの闘いを行為した養豚農民たちをとらえ切れていない感じがある」と黒島文学の転換に触れた。

作家と先行研究はともに、「銅貨二銭」(のちに「二銭銅貨」と改題)と「豚群」のあいだの違いを、目的意識論と関連づけて強調する。だがこのような傾向に対して、本稿は疑義を唱えたい。両者の相違は目的意識の有無に収斂されてよいのか。また逆に両者の共通点には何があるのか。本稿は以上のような問題提起をしよう。二つの作品を検討することにしよう。

一、「銅貨二銭」から「二銭銅貨」へ

前節で述べたように黒島伝治の文学は、青野季吉の目的意識論の影響で思想的に転換したと印象づけられている。そして黒島文学はかつて、さらに別な印象も付されていた。それは「貧しい農民の子」神話とも称するべきもので、壺井繁治「解説」(『渦巻ける鳥の群 他三篇』昭二八・二、岩波文庫)の、黒島は「香川県小豆郡苗羽村の貧しい農家に生れた」(ルビ原文ママ)という紹介に端を発している。これに触れて南雲道雄「黒島傳治論 その初期の性格について」(『農民文学』一九七〇・一二)は、黒島が「貧農出身の作家で、したがって彼の初期の作品は主として貧農の生活が題材」となっていた、といういい方はある程度作品に既成概念を与えたとともに内容をも規制し、悪くすれば作品そのものを歪めかねない」と懸念を示した。また猪俣貞敏「黒島伝

治の軌跡」(『かながわ高校国語の研究』昭四八・五)も次のようにいう。

これまでの黒島研究の大方は、壺井繁治の「貧しい農民の子」という紹介の上によりかかりすぎて、それと黒島が農民の熱い同情者であるということとを短絡させすぎたきらいがありはしなかつただろうか。このいわば壺井の黒島神話、貧農の子の呪縛から離れることが、これからの研究に必要だし、黒島の人柄もその点をおさえないと片手落ちになるだろうということなのである。

前掲三好「豚群」について「は黒島の生家を「貧農とはいえぬが、決して裕福ではない農家というのが実状であろう」という。そのうえで「銅貨二銭」末尾の母親の嘆きを(後述)、「息子に人並みのことをしてやれなかつた貧しさへの怨念に他ならぬ」と説いた。(『貧しい農民の子』)である黒島だから、その作品も貧農に同情的であるのだ、という解釈上の短絡を危惧した南雲や猪俣は正しい。しかものちに詳細な調査により黒島の生家の「生活は楽であったと見るべきであろう」と判断する、佐藤和夫「黒島傳治ノート」(『親和国文』昭五九・一二)が発表される。この論考は、黒島の生家のように不動産・田畑・共同網を持ち醬油会社に勤務する「のを土地では羽織漁師と呼び、小豆島苗羽地区でランクづけすれば準上流である」という地元教育委員会教育長の意見などに基づいて、「作品に登場する世界をそのまま傳治の現実と解釈し、貧農出身という先入観をもって作品論を展開することは大きな誤りとすべきだろう」と述べた。これにより(『貧しい農民の子』)神話はすでに止めを刺されている。本稿もまた右のような色眼鏡

で黒鳥文学を眺めないように努めねばなるまい。そもそも〈農民の貧しさ〉という主題ありきで作品を読み解くことを控え、別の切り口を探る必要があるのではないだろうか。

ともあれ作品の概要を確認してゆこう。「銅貨二銭」は前述のとおり『文芸戦線』(六一・五・一) 初出である。のちに「二銭銅貨」と改題、単行本『豚群』(昭二・一〇、春陽堂)に収録された。作品は大まかに起承転結の構成をとる。つまり、

起……六歳の藤二が母に独楽の緒をねだり、母は短い緒を買って二銭を儉約する。(一)

承……父母が藤二に牛の番を命じ、藤二は牛部屋の柱に緒をかけ、引っぱって伸ばそうとする。(二)

転……藤二は牛部屋で倒れていた。父が牛を六尺棒でなぐる。

(二の 1・2)

結……母は牛に踏まれて死んだ藤二を思い、二銭の始末を後悔する。(二の 3)

という具合だ。四〇〇字詰め原稿用紙一〇枚程度。なお右のうち括弧内の漢数字は章番号を、算用数字は一行空きの区分を表す。作中には「母は、何事にもこせくする方だつた。一つは苦しい家計が原因してゐた」という語りがあふ。さらに本作は母の「あんな短い独楽の緒を買ふてやらなんだらよかつたのに！ 二銭やこし仕末をしたつてなんちゃになりやせん！」(引用は初出による。以下特に断りなければ同じ)という台詞で幕を閉じるから、貧しさゆえに子どもの玩具を買う金銭を儉約し、それが遠因となり子どもを亡くした悲劇に読める。

しかし「藤二」の死をめぐる状況は、もう少し複雑だ。竹本賢

治「黒鳥伝治『二銭銅貨』をめぐって——山の教室から——」(『日本文学』一九五四・五)は、ある研究会での討議で、子どもを抑圧しているものは「封建的家族制度及び家長制であり、

(略)子どもたちは自分の言いたいことも言い出し得ない状態におかれ、これが習慣化しているという結論がでた」という。「家長制」は大げさでも、なるほど作中には「藤二」が母と二、三歳年長の兄「健吉」に圧倒されて、新しい独楽を断念する場面がある。だからこそなおのこと、「皆のよれ短い」緒に我慢ならない「藤二」は、短い緒を引っぱって延ばす——年長者による抑圧を事件と関連づけることは、あながち見当違いでもないだろう。

一方で緒を買うという行為そのものを疑問視する論考もある。前掲南雲「黒鳥傳治論」は、「独楽の緒などは自分で縛うものであって、貧農の感覚ならば買うべきものではない」といい、さらに、

全くの貧農であるならば、緒を買うこと自体に躊躇がある筈であり、どうしても買わねばならなかった。ということから出発しなければならなかったのではあるまいか。だから、作者の意図はあくまで二銭の金を「仕末」することから起つた悲劇を描いたのであって、買えないほどの貧しさの悲劇ではない。極論すれば、母親のエゴイズムから発生した悲劇であるといえなくはない。

という。作中では規格品の緒の価格が一〇銭と設定されている。そして「藤二」が与えられたものは「他のよりは一尺ばかり短い、二銭安い商品だ。買わずともよい一〇銭の商品に手を伸ばし

しながら二銭を惜しむという、いわば矛盾は、あるいは「母親のエゴイズムから」生まれたものなのかもしれない。南雲は無用の購買を看過してきた先行研究の死角を突いている。作品に表れた買う行為自体については後述するが、それにしても悲劇が「母親のエゴイズムから発生した」可能性に、私たちが思い至らないのはなぜだろうか。それは作品（の加筆）が、母の「仕末」を無理からぬものに見せているからではないだろうか。

*

母が二銭を「仕末」する様子は次のように語られる。

緒は幾十条も揃えて同じ長さに切つてあつた。その中に一条だけ他のよりは一尺ばかり短いのがあつた。スンを取つて切つて行つて、最後に足りなくなつたものである。／「なんぼぞな？」／「一本、十銭よな。その短い分なら八銭にしといてあげませ。」／「八銭に……」／「へえ。」／「そんなら、この短いんでよろしいワ。」／そして母は、十銭渡して一銭銅貨二ツ【↓二銭銅貨を一ツ】釣銭に貰つた。なんだか、二銭儲けたやうな気がして嬉しかつた。

【↓】は単行本収録のさいの改変を表す。それが読解に及ぼす影響は後述する。ところで母が渡した貨幣として考えられるもののうち、同時代人に想像される蓋然性の高いものは十銭白銅貨（直径二二・一七mm・重量三・七五g）である。大正九年から一五年には五・三億枚が発行された。⁴一方で「釣銭に貰つた」貨幣は、同時代においては桐一銭青銅貨（直径二三・〇三mm・重量三・七五

g）が想像されるはずだ。大正五年から一三年には一・二・六四億枚が発行された。⁵ここで母が「二銭儲けたやうな気が」するのはもちろん、雑貨店の女主人に、規格品は一本で一〇銭だが、一尺短いものなら八銭でよい、と短い緒を選ぶことで期待もしない二銭という価値を与えられたからだ。初出で描かれた貨幣のやり取りは、一〇銭と二銭という価値自体のそれだと読みとれる。

しかし単行本収録のさいの加筆で当該場面の印象は変わり、題名も「銅貨二銭」から「二銭銅貨」に改まる。これを祖上に載せる先行研究を二三見ておこう。稲垣達郎「黒島伝治の輪郭」（『日本文学』一九五四・九）は、銅貨という貨幣価値の軽少度のうえに「一個、ということ、軽少度をいつそう深く具象しようとしたものとおもわれる」（傍点原文ママ）と作家の意図を汲む。平野謙「解説」（『昭和文学全集53 昭和短篇集』昭三〇・二、角川書店）は、「たつた銅貨二銭のために」といふ主題を生かすためには、原題の方がふさはしいやうに思へる」と述べる。また森山重雄「黒島伝治論——その文学形成と農民小説——」（『文学』一九七三・三）は、次のように推量する。

大きな二銭銅貨がかなりの値打をもっていた時代の話である。作者が「銅貨二銭」を「二銭銅貨」と改題した理由は、二銭銅貨の重みと値打を知っていた大正時代の感覚を重視しているからである。

三者のうち稲垣と森山は、価値の小ささや改訂後の「二銭銅貨を一ツ」という記述に同時代の感覚への訴求を見ている。そして森山がいう「二銭銅貨の重み」とは物理的な重さのことである。二銭銅貨（直径三一・八一mm、重量一四・二六g）は、明治六年か

ら一七年まで二・七八億枚が発行された。桐一銭青銅貨の発行枚数や発行期間も参照すると、同時代に十銭白銅貨を渡して二銭銅貨の釣り銭をもらう蓋然性は低い。だからこそ初出の記述は「一銭銅貨二ツ」なのである。ならば桐一銭青銅貨を二銭銅貨に改めることで得られる、面積は約二倍、重量も約四倍という変化を見過ごしてよいはずがない(図1参照)。このような大きさ・重さに対する同時代の感覚を、たとえば江戸川乱歩「二銭銅貨」(『新青年』大一一・四)に見ることができ。作中人物「松村武」の言葉を引こう。

『俺は、昨日君が湯へ行つた後で、あの二銭銅貨を弄んでゐる内に、妙なことには、銅貨のまはりに一本の筋がついてゐるのを発見したんだ。こいつはをかしいと思つて、調べて居ると、なんと驚いたことには、あの銅貨が二つに割れたんだ。見給へこれだ。』／彼は、机の抽斗から、その二銭銅貨を取出して、恰度、宝丹の容器を開ける様に、ネチを廻しながら、上下に開いた。／『これ、ね、中が空虚になつてゐる。銅貨で作つた何かの容器なんだ。なんと精巧な細工ぢやないか。』(ルビ原文ママ)

このあと一枚の紙片が銅貨の中から出てくる。円周に沿つて二つに切りわけ、中を掘つたうえにネジ山を設けて周りに紙片を入れる——この硬貨は突飛な想像を作家に許すほどの大きさと厚みを持つてゐるのだ。そして同時代のこのような理解のもとで、改題した「二銭銅貨」は読まれる。母の手に載つた硬貨の大きさと重みを読者が想起することで、その存在感は示され、「二銭儲けたやうな気がし」たという母の感慨を無理からぬものに読ませる

だろう。「始末」の不自然さは弱められて、本当らしさが演出される。つまり黒島は「銅貨二銭」を「二銭銅貨」へ改変するさいに、藤二の悲劇を受けいれ易いように同時代の読者に働きかけるべく、感覚描写を巧みに用いたのだ。そしてこのような工夫は、「豚群」においても表れる。

二、「豚群」と靴音

既出のように「豚群」は『文芸戦線』(大一一・一一)初出である。この作品への好評と不評が半ばする同時代に対して、太平洋戦争後の評価はおおむね高い。まず同時代評を見てゆく。強いていえば欠点はあるが「豚群」は傑作である(伊藤永之介「十一月の創作」『文芸時代』大一一・一二)とか、黒島は「この作品によつて真の意味の農民文学の好型を示してくれた」(林房雄「豚群……黒島伝治」『文芸戦線』大一一・一二)とか、「豚群」や「砂糖泥棒」(『文芸市場』大一一・一二)により「いかに小作農民の實際生活が惨めであり、虐げられてゐるかを我々は知る」(中野正人「左翼文壇の新人」『解放』昭二・一)などの言葉がある。一方で作品の結末が不評を買う。小作料の代わりに豚を差し押さえようとする地主に対抗して、小作農たちが豚を野に放つ。そして作品は、彼らは「どうにもせられなかつた」「やつたッけ、やり得だつたのである(傍点原文ママ)」という言葉で幕となるのだが、これに苦言を呈する同時代評がある。「豚群」から「樞」(『文芸戦線』昭二・一九)に到り「観ようによつてはいかにもその当時の宣伝文学的要素を取り入れたやうな、些かの意識化がほ

のめいた」と述べたうえで、「私は『豚群』の結末が少しあき足らなかつた」という前田河広一郎「豚群」を評す（『文芸戦線』昭二・一二）。また「豚群」の労働者の反抗は兎戯に類するようなどころがあり、「プロレタリアートの反抗意識が、この程度の一時の痛快さで充たされるとすれば寂しい」という片上伸「日本プロレタリア文学の三四の作品」（『中央公論』昭三・一）。豚群を野山に放つて快哉を叫ぶことは残念であり、「黒島氏がかうした戦術を作品の中で駆使したことを以て、やつつただけ得だと考へることは蓋し酷なのぢやないかと思ふ」という池田寿夫「黒島伝治論」（『大学左派』昭三・七）など。

戦後にも同様の評が見られる。畑中康雄・伊東信・龍田肇「黒島伝治の文学」（『文化評論』昭三八・一一）は、「ここには闘争の連続性がない。こすつからい百姓が地主に対してゴネ得する、そんな印象を与えかねない結びである」と述べた。一方で好評も見える。「地主小作制度の支配を不当なものとはつきり判断し、これとの闘いを正当だと確信してゆらくことがない」（小田切秀雄「解説」『土とふるさとの文学全集5 反骨の路線』昭五一・二、家の光協会）。「不当な強制に対するたたかいの姿が描かれている」（佐藤静夫「解説」『樗・豚群』一九七七・五、新日本出版社）など。つまり先行研究においては、農民運動はどのようにあるべきか、という問題意識に基づいた批判があり、しかし争議という題材自体は評価される、ということだ。描かれた抵抗の内容は問題となるが、争議の描き方の良否はさして重要視されないのである。だから細田民樹「樗」を評す（『文芸戦線』昭三・一〇）という同時代評が提示する観点は少し異質なものとなる。

二人の人物の対話で組み立てられるこの評は、「豚群」はい、作だ。所謂プロレタリア小説の公式を破つてゐるところで成功してゐる。へんなユーモアもよく生きてゐたね」という讚辞に加えて、黒島の初期作品には「技巧尊重癖に」魅せられてゐるところがあり、「豚群」でも「何故豚を放つか」、「少し読み進まない読者には解らないね」という注意も述べた。この意見が、題材である争議の描き方に私たちを注目させる。「へんなユーモア」とは、そして黒島の技巧とは何か。「豚を放つ」事情はどのように語られるのか。まず作品の概要を確認することから始めよう。

「銅貨二銭」と同じく、作品は起承転結の構成で組み立てられる。

起……小作料に関わる事情から豚飼いに専念する健二が、豚の解き放ちについて考える。（一）

承……醬油屋Ⅱ地主が、小作料を負けてもらおうという小作農Ⅱ従業員に暇を出し、かつ小作料の代わりに豚の差し押さえを企むが、小作農にも豚を解き放つという合意がある。だが自小作農の字一は裏切ろうとしている。（二）

転……洋装の執達吏が来るが、豚は野に放たれ、豚群が野に満ちる。（三の1・2）

結……裏切り者の豚は飢えて斃れ、争議の主謀者はやり得に終わる。（四の1・2）

原稿用紙二〇枚程度。漢数字と算用数字の扱いは既述のとおり。本作の構成上の特徴は、豚を放つ理由が「少し読み進まない読者には解らない」こと、語りが情報を小出しにすることだ。「健二」が豚の解き放ちを考える一章では詳しい事情が示されず、そ

れは二章の前半において明かされる。そして続く後半で醬油屋による解雇、つまり地主と小作農の關係の決裂が回想形式で語られる。ようやくすべての事情が明らかになるのである。前掲細田「「樞」を評す」が触れる一章と二章の分かりづらさは、技巧を活かすためのそれで、語るべき情報を伏せることで読者の興味を惹きつける狙いがある。一章と二章は「少し読み進」むと解るのであり、「読者には解らない」疵はむしろ三章に認められる。豚が野に放たれる過程こそが分かりづらいのだ。

そもそも農民たちは「一勢に豚を小屋から野に放つことに申合せてゐた」のだが、いざ執達吏が村へ入ってきた時、村の半数が豚を出さない。「これちやいかん!」と「健二」たちは「丘の細道を家ごみの方へ馳せ降りて行く。ここで語りの焦点は執達吏たちに転じられて、彼らの差し押さえ失敗の挿話が始まる。結局「夥たゝしい」数の豚が放たれるが、このあいだ「健二」たちがどのように活躍したのか、読者には分からない。それは彼らの行動がまるで描かれないからで、次に彼らが物語の前面に現れるのは「やつと丘の上へ引つかへして、雑草の間で一と息つい」た場面においてである。硬軟いずれにせよ彼らが村の中で運動したことは確實で、そのあとで「一と息つい」たのさう。しかし依然として「健二」たちのどのような活動により豚が野に放たれたのかは不明だ。一方で執達吏たちの悪戦苦闘に照明が当たる。封印（差し押さえ）に入った最初の小屋で豚は柵の中にいた。だが洋装の「彼等の靴音にびつくりして」外へ出てしまう。「この豚どもを逃がしてはならないことに気づい」た執達吏は追いかけるが、「豚はなほ向うへ馳せ逃げ」る。二軒目の小屋に豚はいず、

がら空き。三軒目には子豚をはらんだ雌豚が、一匹横たわっているばかり。彼らはそこで初めての封印をして外に出たところが、野には豚群が満ちていた。「健二」たちが豚追い放ちに暗躍するなかで、執達吏は右往左往することで農民たちが反抗するための時間を稼いでやり、あまつさえ豚を逃がしてしまうのである。彼らはしまいに「腹立て怒つて大切なズボンやワイシャツが汗と土で汚れるのも忘れて、無暗に豚をぶん殴りだした」。彼らの悪戦苦闘が滑稽な印象を与える理由の一端は、その洋装にある。ハイカラな恰好で町から村へやって来た役人たちが、ほうほうの体で帰ってゆくという痛快さ。結局豚が放たれる過程の分かりづらさは、執達吏たちのどたばた喜劇に覆われてしまうのだ。ここで、この喜劇が「靴音」から始まることに注意する必要がある。

*

黒島伝治の文学において「靴音」の一語は重い。彼の靴に関する感慨を、黒島伝治遺稿／壺井繁治編『軍隊日記——星の下を——』（一九五五・一、理論社）により知ることができる。黒島は大正八年二月一日、姫路歩兵第十聯隊第十中隊第四班に入営した。軍靴の支給を受けたはずだが、これが黒島を苦しめた。翌月一五日の記述を引く。「靴をはいていると足も冷い。それに、足にあわないぶさいくな靴なので痛い。もう二十日も前から足にも凍傷がしてはれている」とある。ほか翌月五日にも、各自の支給品を連隊長が検査するのに備えて、「銃、劍、被服、毛布、銃の手下道具、靴、襦袢など片っぱしから完全にしておかなければ

ならないのである」と記される。黒島の軍隊に対する嫌悪のいくぶんかに、靴が関わるものと想像できる。なお反戦的な内容で知られる「橇」(『文芸戦線』昭二・九)の末尾近くに、兵士の行軍を描いた次のような箇所がある。「銃も、靴も、そして身体も重かつた。兵士は、雪の上を倒れさうになりながら、あてもなく、ふら／＼歩いた。彼等は自分の死を自覚した」とか、「空腹と、過労に疲憊の極に達した彼等が、あてもなくふらついてゐた。靴は重く、寒気は腹の芯にまでしみ通つて来た」などの記述だ。雪中行軍の困難を語るうえで、靴が重要な役割を果たしている。黒島文学に靴が登場するならば、それを疎かに扱うべきではないのである。

ところで「足にあわないうさいくな」粗悪品に見舞われたという、黒島の不運を思う一方で、別の可能性も考慮する必要がある。「足にあわないう」(「痛い」)靴の悲喜劇は複数の資料に表れているから、それは同時代に散見された事態と考えるべきなのだ。

たとえば無署名「非衛生的な見栄坊の細い靴 日本人の為に『靴』の講演をする 整形学者者ローエン嬢」(『東京朝日新聞』大一〇・一一・二・朝)は、「靴は穿いた時は踵がピツタリと靴の底について靴の中で動かないやうにしなければなりません」という同嬢の談話を紹介する。彼女は、特に女学生の靴に「踵が高くて足がバク／＼するやうなのを見かけますが」、これは足に悪いという。また無署名「衛生的な靴を選べ 大切な歩き方の心得」(『東京朝日新聞』大一二・一二・一五・朝)に表れる「ミス・ウエルス」の指摘も辛辣だ。

一番目につき、そして耳に障るのは足の持上げ方の悪い事と、

足を引摺る事です。それは日本人の足を引摺つて歩く習慣が去らないで、一ト歩み毎に足を軽く上げる靴の穿き方に慣れないためでせうが、外国ではかうした歩き方をする人は馬鹿、無精者と見做されます。モ一つは足の運びの悪い事で、従つて大きな重たい音を立てます。これは踵に力を入れて歩く為と、衛生的な形の靴を穿かないためです。

類似的指摘は以後もしばしば行われる。そこから窺われることは、「日本人の」靴はオーバースイズであり、さらに独特の歩き方のために大きな音がある、という像が流布していた可能性である。同時代を生きた黒島は、自身の体験も相まって、豚小屋の床板に響く「靴音」を作中でこく効果的に用いることができたのだ。

なお作品にことさら靴が表れる背景には製靴業の発展もある。

そもそも靴が「日本の土地を踏んだのは明治初年。(略)陸軍の拡張と共に急速に発達し」たが、「実用化して、下駄の領域を侵す様になつたのは震災前後からで」(『靴の歩み ゴム製品は露払ひ格』東京朝日新聞社経済部編『商品盛衰記』昭四・二、東京朝日新聞社)あるという。震災後に洋装化が進んで(軍靴に対する)民衆靴の需要が増えたのだ(山川暁『ニッポン靴物語』一九八六・一〇、新潮社)。また震災後は(手縫いに対する)機械縫いの靴が見直されて、(最新式の)グッドイヤー式製靴機械の導入も広まる(日本製靴株式会社社史編纂委員会『STEPS 日本製靴の歩み』平二・一、日本製靴株式会社)。ほか「皮靴も震災前と今日を比すると三割八分の需要増を示してゐる」(無署名「どうして物価は高くなる 安くなるべき靴」『東京朝日新聞』

昭三・四・一四・朝)ことを伝える後年の記事もある。震災後の洋装化と機械縫いの靴の普及により、同時期の靴産業は需要と供給の両面で伸張してゆくのである。

以上の同時代の文脈を「豚群」の背景に置くことが必要となる。豚がびつくりして逃げてしまう「靴音」は、足に合わない靴、大きな音という同時代の像を描いて理解されるものではない。さらに靴を履いて洋服を着た執達吏が町から村へ入ってきたものの散々な目に遭って帰ってゆくという戯画も、洋装の普及と発展する製靴業という背景があればこそ描かれるものだ。これあればこそ、靴や洋服を身につけて町からきた小役人の本当らしさが成立するのである。そしてこの小役人が演ずるところの滑稽が、豚が放たれる過程の分かりづらさを覆うならば、「靴音」という聴覚に訴求する一語は、やはり重たいといえるだろう。

おわりに

「銅貨二銭」と「豚群」のあいだに、目的意識論を享受したことによる黒島文学の変化を見ることは可能である。それは「豚群」が農民運動に取材するのみならず、プロレタリア文学特有の問題意識を随所にちりばめていることから説明できる。たとえば争議を裏切る「宇一」が自分の田畑を持っている人物として現れることで、自作農の小資本家的側面が強調・批判されること。小作農と争う村の地主が町の資本家と同一人物であるという設定。

これらには、無産者である小作農が境遇を同じくする労働者と共闘する必要を訴える、プロレタリア文学のいわゆる公式がかいま

見える。また主人公「健二」は初め争議に傍観的な人物で、のち中心人物へ成長してゆくのだが、このような展開も階級意識の獲得というプロレタリア文学運動の要件に適うものだ。作中には、争議を行うことによる不利益を我慢せよとか、争議は皆で一斉に行えなど農民運動における教訓めいた言葉もある。だが二つの作品の違いはそれだけではない。先述のとおり、「銅貨二銭」にはい皮膚感覚や聴覚に訴える描写が、「二銭銅貨」や「豚群」には認められる。目的意識論の影響に焦点を絞る議論は、有意義な読解の端緒を多く取りこぼしてきたといべきだろう。

さらに二つの作品が、共通点を持つことも看過できない。都会と田舎が対比的に表れることがそれだ。

まず「銅貨二銭」には消費文化が田舎に流入して、暮らしを变える様子が表れる。先述のとおり南雲は、「全くの貧農であるならば、緒を買うこと自体に躊躇がある筈」という。なるほど家計が苦しいはずが、緒を綯うでもなく買うことしか考えないのは奇妙かもしれない。しかし二銭を節約する母親のエゴイズムを読みとりうる一方で、必要性の低いものであれ「買うこと自体に躊躇がないことに同時代の(さらに現代に通ずる)世相の反映を読みとることもできるのではないだろうか。竹村民郎『大正文化』(昭五五・一、講談社)は大正時代に「大量消費時代の到来」を見る。そして「充実した消費生活」を指摘する。瀬崎圭二『流行と虚栄の生成——消費文化を映す日本近代文学——』(二〇〇八・三、世界思想社)も消費社会における消費を、

ただ単に財やサービスを消耗していく行為を表すのではなく、ある一定の共同体に想像的に共有される流行の速度を媒

介としながら、その事物に対する必要性をあまり問題としな
いところに現象する商品の購入のあり方を指している。(ル
ビ原文ママ)

と述べる。これを読解のための補助線に用いることで、苦しい
家計のなかで独楽の緒を買う行為に一定の説明を与えることが可
能になる。右の引用は中央都市における消費を念頭に置いたもの
だが、作品にはそのような消費文化が地方に——小豆島に——流
入して、田舎の暮らしを変える様子が表れたわけだ。新しい独楽
を「買ふておくれ！」とねだる、そして「皆のよれ短い」規格外
の緒に我慢がならない「藤二」と「緒を買うこと自体に躊躇が」
ない母の悲劇は、消費文化の村落への侵入が招いたものでもある
のだ。

また「豚群」は町から来て惨めに帰る執達吏の足元に靴を配し
た。同時代において靴は、その都市における普及が伝えられてい
る。

今和次郎・吉田謙吉「一九二五年(初夏) 東京銀座街風俗記録」
〔婦人公論〕大1四・七〕は、「男は洋服六七に対し和服三三三」
という百分率が「一、一八〇人を調べた」結果、得られたという(図
2参照)。洋装の足元を単純に靴と考えると、約七割の男が靴を
履いていることになる。ほか大町敏子・名取まつ子調査/今和次
郎整理「小樽市大通(花園町) 服装調査」〔考現学採集〕昭六・
一二)も、靴と下駄の「比は約六対四で、小樽市の男子の間には
履物として靴が勝ちを占めてゐる」とまとめた。三年前の銀座に
おける約七対三に対して靴の比率はやや低い。なお当該の調査を
整理するなかで地下足袋とわらじの比が「二五対四と出た」こと

を今は、「大正十五年の甲州の山間地の村に於ける採集では、ゴ
ム足袋と鞋との比は二四対一と出てゐるのに対して、(略) 都市
の中央に於てかゝる数字は尙未だ内地と比して余程旧式である」
と評した。本州からその外へ、都市から山間部へ履き物が改まる
という像がここにはある。町から来た執達吏が立てる「靴音」に
は、町村の対比が端的に表れていると考えるべきだろう。

右のように二つの作品が都会と田舎を対比的に捉えることと、
作家自身が同時期(大1四・一〇)〔昭二・五)に雑誌「地方」
の編集に参画していたこと」が確かである(高橋春雄「黒島伝治
と雑誌「地方」のこと」『文学的立場』昭四五・一二) ことは無
縁ではないだろう。作中に靴が表れる場合と同じく、黒島文学に
おいては都会と田舎の対比も、それがただ偶然にあると考えるべ
きではない。両者の対比と、さらに後者に対する助勢という意図
を酌みとるべきだ。ともあれ以上、目的意識の有無を越えでる初
期黒島文学の一面が明らかとなる。都会と田舎の対比という観点
が「銅貨二銭」と「豚群」の双方に見えること。そして感覚描写
という小説技術が改題・改変された「二銭銅貨」と「豚群」に顕
著に表れていること。これらの特徴に注目することで、私たちは
黒島文学を一層深く理解することになるのである。

注

(1) 本邦の文学者がその作品に親炙した、フランスの文学者であ
るフィリップ(Charles-Louis Philippe)は、同時代において
階級芸術の作家として、また郷土芸術家として捉えられていた
(中村星湖「生麦雑誌 郷土芸術に就て(五)」『時事新報』大

一・一〇・二〇・夕)。黒島「僕の……」はこれを踏まえて、往時の自らの作風を微温的なものとして自己批判したのだと思われる。

- (2) 作家の出自と関係なく作品に(貧しさ)を読みとる論考もある。岩堀基「黒島伝治について(一)」——香川文学の出発点——(『四国作家』昭三七・九)は、黒島の「農民文学の諸作品は、(略)貧困に苦しむ農民の生活や地主の横暴、資本主義の農村への侵入などの現実がレアリティックに表現されている」と論じ、「二銭銅貨」は「明らかに貧困が生んだ悲劇である」と述べる。さらに山口守罔「黒島伝治「二銭銅貨」と「豚群」」(『民主文学』一九八七・一一)も、「二銭銅貨」で起こる事件の「示していることは農民の貧しさの象徴であり、日本の農村の縮図である。新しい独楽を買ってやるどころか、緒を買う二銭の金さえおしまなければならぬ母親」が描かれると述べる。
- (3) 単行本所載「二銭銅貨」末尾には「一九二五、九月」と注記がある。脱稿の時期を示すか。なお単行本所載「豚群」末尾にも「一九二六・十月」と注記がある。
- (4) 昭和七年までにさらに一・二三億枚が発行された。なお貨幣の直径・重量や、発行枚数・発行期間については、石原幸一郎編纂『日本貨幣収集事典』(平一五・五、原点社)や、利光三津夫他編共著『日本通貨図鑑』(平一六・六、日本専門図書出版株式会社)を参照した。
- (5) 昭和十三年までにさらに七・六四億枚が発行された。
- (6) 伊藤は、「強いて難を言へば可也入念に地主との争議を描いて居りながら事件及び人物の影が稀薄である」と述べている。
- (7) ただしこの論は、「豚群」は黒島伝治の農民小説中でもかなりすぐれた作品であり、おもしろさも拔群である」と作品を称

揚している。

- (8) このほか小田切秀雄「解説」(『黒島傳治全集 Ⅰ』昭四五・四、筑摩書房)は、黒島が労働者運動・プロレタリア文学の飛躍を「どのように自分の内的な世界の問題として受けとめていたかは、『二銭銅貨』の文体や表現といくらちがう闘争的なユーモアが「豚群」のなかに躍動していることのかなかに一つの現われをもっている」と分析した。またドナルド・キーン著／徳岡孝夫訳『日本文学史 近代・現代篇二』(昭五九・一一、中央公論社)は「生真面目すぎるプロレタリア文学の中で、愉快な空想の躍る黒島の『豚群』は、一服の清涼剤と言えるのである」と評価した。

- (9) たとえば伊東茂平(山岡毛皮店婦人洋装部)「瀟洒な洋装とはどんなものでせう?——帽子、襟巻、靴下、靴の注意——」(『婦女界』昭五・三)(ルビ原文ママ)は、「一体日本人は靴が大きいのでせう?」と述べる。また安江雅勝(日本足袋株式会社技師)「靴の常識(一)」(『被服』昭六・一)は、「靴の大きさと足の大きさが合理的に適合せぬ故」、靴を穿くと窮屈で豆ができる、その反対に靴の中で足が躍るなどの結果を招く。「未だ日本では靴の選び方が充分徹底せぬので喜劇が随所に沢山あります」と述べる。さらにキヤサリン・サンソム著／大久保美春訳『東京に暮す 1928—1936』(一九九四・一一、岩波書店。原本はKatharine Sanson, *Living in Tokyo*, London: Chatto & Windus, 1937)は詳しく次のように述べている。

日本の履物をはいた時には足を引きずって歩きます。引きずらなくてははいけません。履物の構造上どうしても足を引きずるようになるのです。日本人が固い地面を歩く時のパ

タバタという音を嫌う外国人もいれば、心地よい音だという外国人もいます。その音は日本人の生活のゆっくりしたリズムであります。ところが革靴を引きずると堪え難いほど不快な音がします。

なお靴に関して角田由美子「大正末から昭和初期における靴の変遷」〔学苑・近代文化研究所紀要 平一八・八〕所載の「靴に関する記述資料」を参照した。

- (10) 佐藤栄孝編『靴産業百年史』(昭四六・三、日本靴連盟)所載の「大正時代の革靴生産数量」によると革靴生産数は大正一年に一五七万足(概数。以下同じ)、一二年に一四三万足、一三年に一六二万足、一五年に二二七万足と増加傾向にあるという。

- (11) 作中には、「隣部落の寺の広場へ、田舎廻りの角力が来た」という文脈がある。また「えい」(良い)、「ウラ」(私)、「さら」(さらっぴん 新品)、「……やかい」(……など)、「ボッコ」(非常に)、「はい」(早く)、「おどれ」(貴様)など小豆島方言が見える。小豆島の民俗を語る会編『小豆島の方言集』(平一三・五、小豆島民俗資料館)参照。なお作中で「ドーナリヤ(どうなるか)」「厭だなあ」という意味合いで用いられているが、右の方言集によればこの語義は「どうない」に充てられるべきだ。

- (12) 当該の履き物調査は昭和三年八月九日午前に行われた。

- (13) 都会を排して農村の尊重を唱える雑誌『農民』(昭二・一〇〜昭三・六ほか)派との立場の類似も気になる。黒島は『農民』の発行母体である「農民文芸会」に名を連ねている。

【付記】 本稿は資料の引用に際して原則的に新字体を用いたが、引用元の資料が新字体を採らず「傳治」の表記を用いる場合は、その意向を尊重した。併せて「壺井」の表記も改変を控えた。

【謝辞】 関谷一郎先生主催「ヒゲラシゼミ」(二〇一四、於東京学芸大学)で本稿について発表し、錬成の機会を得た。ゼミに参加された諸氏に、末尾ながら鳴謝申しあげる。

(むくぼうてつや 本学兼任講師)

図1 上から十銭白銅貨、桐一銭青銅貨、二銭銅貨。台紙は五mm方眼紙。

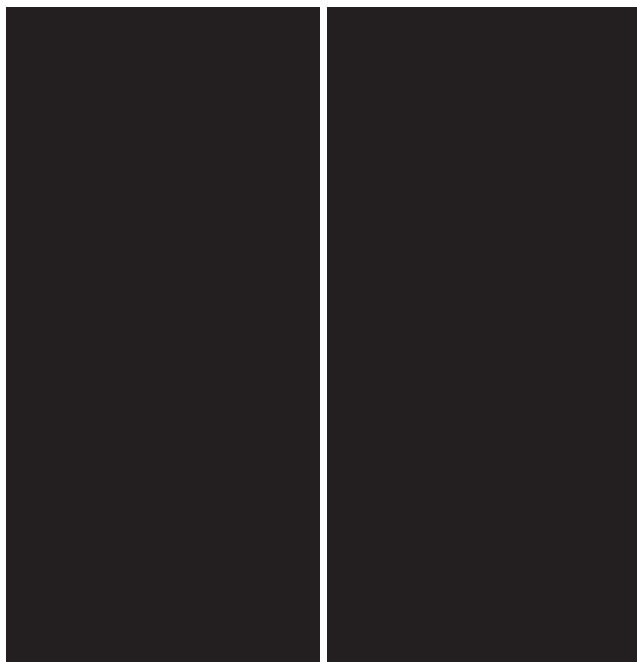


図2 「一九二五年東京銀座街風俗記録」口絵

